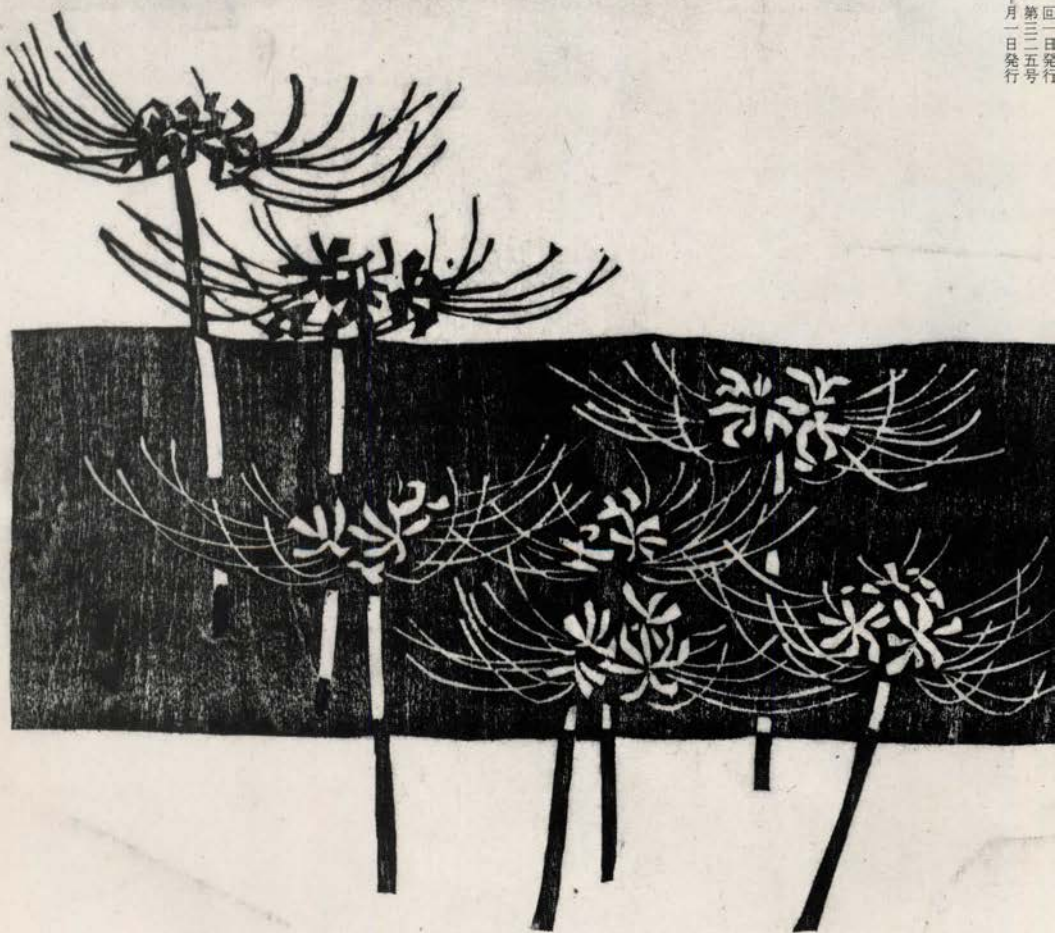


# 淨土

1991-10

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 毎月一回一日発行  
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授受承認雑誌) 第三五号  
平成三年九月二十五日印刷 平成三年十月一日発行  
第五十七卷 十月号





# 十月の秀句

わがあとに径もつき来る秋の山

富安 風生

秋水に林のごとき藻草かな

富安 風生

照葉して名もなき草のあはれなる

富安 風生



往生浄土のはかり事、弥陀の名号  
に過ぎたるはなく、頓証菩提の  
道、ただ称念の一門にあり。

——『念仏大意』

## 目 次

### ＝連 載＝

生も死も悦べる世界(一)……………須 藤 隆 仙……(2)

仏教とデス・エデュケーション

——私の活動ノート——

[Ⅳ] ……藤 木 雅 清……(9)

### 〈寄 稿〉

陶禅三昧……………石 橋 紅 呂……(23)

季語やぶにらみ (10)

……………木 下 隆 一 ……(26)

晩夏の花二題、烏瓜・竹煮草

◇◇心のしらべ・生活のうた②◇◇

俳句の作り方……………細 田 隆 善……(16)

表紙絵 小林治郎画

連  
載

生も死も悦べる世界(一)

畜生と人間

編集の方から何か執筆をと依頼されて、「死を悦<sup>よろこ</sup>べる世界」という題を考えてみたのですが、これではちよつと誤解されるおそれがあると思い、「生も死も悦べる世界」と変えてみました。

須<sup>す</sup>  
藤<sup>とう</sup>  
隆<sup>りゅう</sup>  
仙<sup>せん</sup>

(函館市称名寺住職)



「死を悦べる世界」では、「死」だけが悦べるもの、「生」は否定されるべきもののよう  
に受け取られるおそれがあるからです。

仏教は「生」も悦び、「死」も悦ぶ世界だと思ふのであります。

というと、反論が起るかもしれません。「仏教では生も死も苦と教えている」と。

確かに、そうではあります。しかし仏教は「生死解脱げだつ」というのですから、生と死を単  
に苦としてだけ教えるのではなく、そこから脱し切る、逃れ出る、ことを教えているので  
あり、生死の苦を脱し逃れば、涅槃ねはん（安楽・寂靜）だと教えるのですから、「生死は苦だ」  
というよりは、「生死は楽に変わるものだ」と教えているのではないのでしょうか。

ただしそのためには、「脱し切る」という条件が不可欠なわけでありまして、その脱し  
切り方が、仏教徒のものの考え方、そして行いでなければならぬはずであります。

今はここで、浄土宗の開祖法然上人のみ教えの上に、その脱し方を学ばせて頂くことに  
いたします。

先ず法然上人の次のお言葉を、よく熟読してみたいと思います。

「受け難りき人の身を受けて、逢あい難き本願に逢いて、起おこし難き道心を起こして、離れ  
難りき輪廻りんねの里を離れて、生まれ難き浄土に往生せん事は、悦びの中の悦びなり」（二紙  
小消息）

これは人として生まれ出てきた意義を、もつとも簡明直截に、ズバリと言い当てられた、すばらしいお言葉だと思ふのであります。

以下、順次に愚考を記していきます。

「受け難き人身」、何というすばらしい実存の意識でありましょう。人間がこの世に生を受けるということは、決して簡単なこと、容易いことではないのであります。

それなのに、私は今、人間としてこの世にあるのであります。よく考えてみると、それは実に重大なことであります。もし同じ生を受けるにも、人間以外の動物として生まれていたならば如何でありましょうか。

今は動物（人間以外の）受難の時代といわれております。学者の研究では何万種という動物が、生き延びることが出来なくなつて、地球上から姿を消していつていくというのであります。

近くに例をとつてみましても、ペットブームなどといわれて、人間の自己本位な愛玩に供されているのはまだ幸せな方であつて、じゃまになればどんどん捨てられているのであります。テレビで子猫がごみといつしよに捨てられているのが放映されておりますが、子猫でも子犬でもごみとして出され、縁日に買つてきたヒヨコが、糞をするというので平気で捨てられたりもしております。引越しする人が、ペットを捨ていくのも困つたもので

す。最近ある新聞に、「シロに見るペットの末路、多くは生体実験に、動物虚待を病院に抗議」という見出しで、次のような事が報じられておりました。

「生体実験室から命からがら生環した一匹の犬がいる。手術後の経過を見るはずだった医師からなぜか忘れ去られ、傷口はひどく化のう、皮膚病で耳は崩れ落ちるという姿で外部の人に保護されたのだ。病院側は管理の手落ちは認めたが、動物に苦痛を与えた点での反省はあまりないようだ。

『動物実験の廃止を求める会』によると、M市の国立病院の構内で、足を引きずり腰の手術跡も生々しい犬を会員が見つけたのが昨年十月中旬、この犬が収容されている病院の犬舎に何度か足を運び様子を見るうちに、犬（会員はシロと呼ぶようになった）はますます衰弱し、立ち上がるのもやつとの状態になった。

会員は飼育係に『獣医に見せて』と頼んだが断られたので「緊急保護」措置として十月初め、カギのかかっていない犬舎からシロを連れ出し、現在手当てを受けさせている。

当時のシロは、顔の毛はほとんど抜け落ち、耳は疥癬<sup>かいせん</sup>のかさぶたで固まって先端が壊死<sup>し</sup>。脊椎<sup>せきつい</sup>手術を受けた跡にはタコ糸が残り、傷口を中心に皮膚の下いっぱいうみがたまっていた。

病院は同十七日、会員から抗議の電話を受けるまで、犬がいなくなっていることに気付かなかつた。二十日、同会に対して病院が行つた説明会によると、シロは下半身不随の人の治療に役立てるため、九月上旬、整形外科の医師が脊随（正確には馬尾神経）を切り、その回復の度合いを見る過程にあつたという。

しかし術後は飼育係に任せきりで、医師はシロが疥癬にかかつていた事実も知らず、動物に対する無関心さを見せつけた。病院は施設の改善を約束、「犬は大切な試料だから返してほしい」と求めたが、同会は拒否し平行線のままだ。

また、犬猫を研究機関に払い下げている各自治体に対し、同会は「ペットを保健所などで引き取る際、持ち込む人に、実験に使われることをはっきり知らせるべきだ」と訴えていくという。というのも持ち込む飼い主側には「最悪の場合でも安楽死させてくれるもの」という甘い期待があるからだ。

総理府統計によると、平成元年に日本全体で保健所、動物センターなどが扱つた犬約四十一万匹のうち実験用に払い下げられたのは約六万匹。猫は三十四万匹のうち一万二千匹。同会の代表は「飼い主が持ち込んだ成犬猫は、健康であればほぼ百パーセント、実験室行きとみて間違いない」と指摘している。

この病院は「うちは犬舎などの施設はいい方で、都からも褒めてもらっているほど」

と言う。だとすると、ほかの研究機関ではもっとひどい扱いなのだろうか。シロは動物実験の実態の「生き証人」と言えそうだ。」

皆さんはこの記事をご覧になって、どうお考えでしょうか。本当にひどい話であります。動物実験は、犬や猫だけではなしに、サル、ウサギ、モルモット、ネズミ、その他、いろいろな種類が使われていることは周知のとおりですが、すべて人間が生き延びるために、これらの生きものが犠牲になっているのです。

それにつけても、このような動物に生まれてこなかった自分に、つくづくと感謝しなければなりません。そして動物愛護ということにもっともつと心を致す必要があると思うのであります。

平安時代にお念仏を弘められ、法然上人も思想上の師とあがめられた恵心僧都は、『<sup>かわ</sup>川法語』に、「夫れ一切衆生、三悪道をのがれて人間に生まるること大いなる悦びなり。身はいやしくとも畜生におとらんや。家貧しくとも餓鬼にはまさるべし。心に思うことかなわずとも地獄の苦しみには比ぶべからず。世の住みうきは厭うたよりなり。人かずならぬ身のいやしきは菩提を願うしるべなり。このゆえに人間に生まるることを悦ぶべし」とご教示なされました。何という尊いご教示でありましょうか。

私たちは、どんなに苦しくとも、畜生の世界、餓鬼の世界、地獄の世界よりはましであ

ります。

地球上では、愚かな戦争のために不幸になったり、後進国の悪条件で不幸にあえぐ人たちがたくさん出ております。

しかし、そうした人たちも、畜生のよりはましなのであります。同じ悪条件の中でも、畜生よりはよく扱われますし（部分的には例外もありますが、総体的に見れば）、救いの手も畜生よりは人が先行されます。

そして、何よりも人は、万物の霊長といわれるように、他の動物より優れた心というものをもっております。そのような存在に生まれてきた（深い信心からいえば、生まれさせて頂いた）、そのことが、ただただ有難いのであります。

恵心僧都のご教示にありますように、人間であれば、たとい住みづらい苦しみでも、逆にそれを向上の機縁に転じ、至らぬ身であってもそこに却って向上の道が開かれるというものであります。

そう考えれば、人間と生まれさせて頂いたことは、真に有難いこと、勿体ないことです。

（つづく）

仏教とデス・エデュケーション——私の活動ノート——……(4)

藤<sup>ふじ</sup>木<sup>き</sup>雅<sup>が</sup>清<sup>せい</sup>

(D・E・S  
臨死問題研究会代表)

ホスピスの模索

日本でも一九七〇年代からターミナル・ケア（末期医療）の必要性が叫ばれ出した。元氣になって退院していく患者とちがいに、死にゆく患者には特別な配慮をすべきだという主

張である。これは、感染症が激減し慢性病が多くなったという疾病構造の変化も関係している。慢性病の多くは生活習慣病といわれるように永年の生活ぶりが積み重なって現れるので、即効薬や特効薬はない。治療するのはなく、症状を押さえて療養する。がんも増加している。治らないまま末期を迎える人が

増えてきた。そういう患者さんを対象とした医療施設がホスピスである。独立施設、院内独立病棟型などいろいろな型がある。

ホスピスは、わが国でも先進の浜松聖隷ホスピス、淀川キリスト教病院ホスピスをはじめ、現在、ホスピスケアを実践している施設がようやく二ケタになってきた。イギリスで発生しアメリカや欧米諸国で普及してきた近代ホスピスは、四つの痛みのケアが中心なので、宗教性が問題になる。わが国でもキリスト教系病院が母体になっている場合が多く、かけ声ほどに施設が増えない原因はホスピスの宗教性にあるのではないかといわれている。最近では厚生省が、「宗教を考えないホスピス」という意味なのか、緩和ケア病棟というシステムを提唱して、国立病院などでも末

期ケア専門の施設を検討しはじめている。しかし、前回まで述べてきたように、死というもつとも実存的な「いのち」の問題に真面向から取り組もうというとき、宗教抜きなどということが考えられようか。ホスピスという施設自体、宗教的ケアを大きな柱として掲げている。

それでは日本では仏教を母体としたホスピスがあつてしかるべきだ、という声があり、浄土真宗のビハーラ運動など、ごく一部でそのような要請に応えるべく動きは始めている。とにかく、医療施設のなかでの末期医療専用病棟としてのホスピスの必要性が認められているのである。

## 病院をつくりたい

D・E・Sの活動をつうじて、つくづく医療と宗教の連携が大切に感じた。一部の医療関係者には私たちの主張を理解してもらえませんが、現在の病院の組織は宗教者と協力しあうことを阻害している。私たちも交流のある医師をつうじて何度か病院に足を運んだが、院内で位置づけできるような状況をつくるのはむつかしいと思っている。「珍しい存在」といわれているようではいけない。どうしたらよいのだろうか。

われわれで病院をつくる。それしかないと痛感しあれこれ検討してみた。しかし、病院という以上、医師や看護婦の業務を私たちが

するわけにはいかない。ならば、医師や看護婦を養成できる機関がなくては意味がない。

(看護学部併設の)大学医学部と付属病院……。こう考えていくととても手の届かない課題である。しばらくの間、「どうしても救いのある施設をつくりたい」という情熱をわが胸に抱きつつ会活動をつづけていた。

## ホスピスとは何か

ターミナル・ケアの必要性が叫ばれているが、そこでいわれるのは、(肉体的)痛みの軽減、精神的な支え、医療者との患者の意思疎通などである。こんな基本的なことは普通の医療でもとうぜんなされるべきであろう。現状の医療はこうなっていないから、せめて末

期の患者には……というわけである。ホスピスが、痛みに耐えることなく、患者（病める人）をさまざまに支え、ケアする側される側という境界なくコミュニケーションが十分にされる——こういう施設のことであるならば、病院（医療施設）でなくてもできるのではないかと思っている。

ホスピスケアのうち医療者でなければできないことは近隣の病院と連携すればよい。そういうた外的条件はどうにでもなるだろう。ホスピスをホスピスたらしめている条件とは何か？ それは患者さん（病める人）の救いであろう。ならば、その一点に共鳴する人びとの集団があればよいのではないか。施設、医師や看護婦などの専門職、システムさえも二次的な条件である。何よりも大切なのは、

目標があり、その目標へ向かうという方向性さえまちがっていなければ、成就するはずである。そういう願をもち、その願のもとに集う組織をつくりたい——これが現在の私の唯一最大の目標である。ホスピスとかピハーラとか名称にはこだわらない。そんなものはホスピスではないといわれるならそれでもいい。しかし、名称はどうであろうとも、そういう集団をつくりたい。

### みんなボランティア

ボランティアというと、ある種独特な響きがある。受け取る人によってさまざまな意味を感じるであろう。

私はこのようにとらえている。金銭授受の

あるなしにかかわらず、仕事の内容にかかわらず、そこに関わる人はすべてボランティアである、と。これも名称にこだわらない。そういうのはボランティアとはいわないというのなら、それはそれでいい。私が目指しているのは「病む人」を「癒す家」であるから、それ以外のことはどうでもいい。この「病む人を癒す家」に何らかの協力をしてくれる人はみんなボランティアであり仲間である。考えられる仕事は無限にある。必要に応じて自動車を運転する人、花を植える人、料理をつくる人、靴を磨く人、掃除する人……。このような人たちが「病む人の癒し」に役立っためには何が必要なのか。それはコーディネーターである。

よくボランティアなどというと、「私は何

もできないから」という人がいる。しかし、私は、何もできない人などいないと思っている。無財の七施と同じ、お金がなくても、資格や特技がなくてもみんな果たせる役割はある。たとえば身体の不自由な独居のお年寄りがいるとする。昼食を一人前余分につくる主婦とそれを届ける人がいれば、ひとつのボランティアが成立する。そう考えれば簡単だ。可能なことをひとつずつ積み重ねていけばいい。助けが必要な人がいて、何かを手伝う人がいて、それを結びつける人（コーディネーター）がいればいい。

E・キューブラー・ロスの本に「私たちは悲しみに打ちひしがれていた。そのとき、この物静かな隣人は現れた」という書き出しではじまるつぎのような挿話がある。ある日突

然、兄夫婦一家全員が交通事故で死亡した。

悲嘆にくれて何をどうしたらいいのかわからない。頭のなかが混乱している。洗濯をする前で汚れた服は積み上げてある。夕食の跡片づけもまだ済んでいないし、オモチャはいたるところに散らかっている。自分は事故の起きた遠隔地に行かねばならない。そのとき、普段あまり話したこともない近所の男性が来て「あなた方の靴を磨こうと思って来ました」という。怪訝な顔をする家人にその人は、父親の葬式の日、子供の靴をピカピカに磨くのに時間がかかった経験があるからといった。そして黙々と家中の靴すべてをピカピカに磨いて帰って行った。靴のことなどとても頭が働かないとき、その隣人の靴を磨く姿を見てようやくわれにかえた。「そうだ、まず洗

濯からしよう」。

この挿話は、ボランティアについて、私たちが考えている以外の示唆を与えてくれる。すなわち、ボランティアといっても身構えて特別なことをするのではなく、ごく日常のこの手助けをすることの重要性を語っている。

病院をつくるなど大きいことをいっているが、その程度のことでも満足するのかという人もおられることだろう。しかし、このような人たちの集まりがホスピスなのではないだろうか。こういう集団が必要なのだ。むしろ、このような集団さえあればいいとすら思っている。こういう集団があつて、たまたまそのなかの誰かが亡くなる。みんなで弔う。これこそ現代版の二十五三昧結社なのではな

いだろうか。

このように大仰にいわなくても、お寺というのは多かれ少なかれコーディネートしているのではないだろうか。お檀家に子どもの登校拒否で悩んでいる家があると、お檀家や知り合いの教育専門家を紹介する。また、体調が悪くて悩んでいる人に〇〇療法のことを伝える、等々。基本的には、このようなシステムが、多岐的かつ日常的に機能するかどうか、あらゆる病理に対応できるようなネットワークになっていくか、というような課題をどう克服するかなどの問題はあがあるが、「病む人の癒し」という旗印の下に多くの人やお寺が展開していけばすばらしいと思う。

当初は「教団で病院の一つももたないで」などということから、活動をつづけてきて、た

どりついたひとつの結論である。一つの病院より「病む人の癒し」キャンペーンである。病院は意味がないといっているのではない。何もかも（病気を治すことだけでなく人が死にゆくまで、という意）を病院に頼らなくてもよいのではないかといいたいのである。

私の活動体験から、四回にわたって思いつくままに述べさせていただいた。今回述べたことが、現在、私のできるもつとも必要かつ最大のことでないかと思っている。そして、皆さんのご協力のもとに仲間と歩んできたD・E・Sの活動は、このような実践の場に収斂していったこそ意味があるものだと思信している。

（おわり）

心のしらべ・生活のうた(二)

俳句の作り方

俳句はだれでもどこでもたやすく作れる生活の詩であります。日本は世界の中でももっとも四季の移り変わりの美しい国です。日本人は古来、桜の花を愛し、月を賞し、雪を賞でてきた詩の心を持っています。そして日本は山の美しさ水の美しさに恵まれ、旅を愛する心から俳句

細田隆善（俳号豊明）

が親しまれてきました。

さらに日本語は七五調であることから、自然にリズムミカルに俳句がつづられてきました。日本の四季の美しい大自然を愛する心から、又、日本語の特色の中から俳句が生まれてきました。日本語さえできればだれでも俳句は作れるはず

です。子供俳句もお世話していますが、子供は素直な俳句を作ることができま  
す。また高齢の方々も文芸に親しむこと  
がさかんになり、八十歳、九十歳の方で  
はじめて俳句に親しまれるようになり、  
りっぱな俳句を作られるようになりまし  
た。俳句はだれでも作れるものです。だ  
れでも俳句は作れますが、つぎの十項目  
は俳句を作る大切な要件です。

### ① 五七五のリズムを守ること

歌舞伎のセリフが親しまれ、古典が口  
述されてきたのは七五調であるからで  
す。日本語は母音と子音の組み合わせで  
あって、外国の言葉と異なります。俳句  
は和歌や連歌から独立し、五七五の定型

を基本とします。世界でもっとも短かい  
詩といわれています。固有名詞などでこ  
の定型にならない例外もありますが、で  
きるだけこの定型におさめることが一番  
大切です。

あうみ  
荒海や佐渡によこたふ 天河

芭蕉

### ② 俳句に季語を

俳句は前項のように五七五の定型にす  
ることが大切ですが、俳句に季語  
を入れることも又、重要なことでありま  
す。季語は季節を表す言葉で季題ともい  
い、季節に恵まれた日本の風土に俳句が  
成長した理由であり、季語は三千以上あ  
りますが、よく使用されるのは五百とい  
どです。

季語は通常、春夏秋冬、新年と五つに大分類し、さらに時候、天文、地理、生活、行事、動物、植物の七つに分類します。季語を集めた本を歳時記さいじきといい、俳句を作るにはこの歳時記が必要、季語が解説してあり、古今の作品が参考としてかかげてあります。

季語は俳句の重要な生命であります。一句の中に季語を二つあつかうのを季重ねといい、俳句には季重ねをさけたものです。俳句の中心が分裂するからです。しかし三つも季重ねをした有名な俳句があります。

目には青葉山郭公ほととぎしがつを初松魚

素堂そどう

青葉と郭公と鯉の三つの季語が重なっています。しかし視覚による初夏の青葉

と聴覚による初夏の爽やかな時鳥の声と味覚による初鯉の味のよさの三つが、調和して初夏の清々しさを表現しているから、佳句として現在もよく親しまれています。しかし句を勉強するときは季重ねを避けましょう。俳句ほど季節感を重視する詩は世界にありません。

### ③俳句は写実的に

俳句を作るのには対象をより写実的に、具体的に表現するようにしましょう。対象を見聞したままに句作することが大切であって、観念的、抽象的な表現は避けましょう。

五月雨さみだれを集めて早し最上川

芭蕉

#### ④ 句の意味が解るように

作った俳句が、第三者によく解るように作ることが大切です。一人よがりの句はいけません。

五月雨さみだれの降りのこしてや光堂ひかりどう 芭蕉

#### ⑤ 句は文語体で

俳句は文語体で、又は口語体で表現してもよいのですが、なるべく文語体（旧カナ）で表現しましょう。「思う」は口語体、「思ふ」は文語体です。辞書をひけば解ること。文語体で表現した方が格調高い句が作れます。また先人の句をよく観賞することができますからです。

庭のてふ子が這へばとびはへばとぶ

一茶いっさ

「てふ」は蝶のことではありますが、口語体では理解しにくい点があります。

#### ⑥ 一字一句を大切に

俳句は世界最短の詩、字数が少ないから一字一句を大切にしましょう。辞書を座右の書として正しい文字を使いましょう。文字は常用漢字以外の文字も可、外来語も句にしてよいものです。日本は国際化して二割ていどの外来語を使用しています。俳句は生活の詩でありますから外来語も自由に使用してください。近年は植物などに外国から数多く輸入されて季語をとまっています。

ヒヤシンスレースカーテンただ白し

青邨 せいそん

### ⑦ 簡潔、省略、余情

俳句は短型詩であるので最大限に省略することが大切、簡潔にした方がよい俳句になります。俳句は散文ではないので要は簡素化することです。喜怒哀楽の語は使用しないようにし、読者がそのように読みとればいいのです。

猫の恋やむ時閨の朧月 ねや おぼろつき

芭蕉

### ⑧ 句は人に見せよう

俳句は一人よがりのものではないけな  
い。第三者に見てもらい、よしあしの指摘をうけることも勉強になります。人の

俳句を見ることが勉強になります。そのため俳句のグループと勉強すると大いに効果があります。

梅若忌とて渡りけり隅田川

久雄

### ⑨ や、かなの切れ字

や、かななどは切れ字といって、想いを強めたりする言葉であります。使い方によって効果がありますので俳句にはよく使用されます。省略の手法でもあります。

古池や蛙とびこむ水の音 かわす

芭蕉

### ⑩ 俳句は続けること

俳句は続けることが肝要、俳句は一年中季節が変化してそれぞれの季節に季語

＜日本図書館協会選定図書＞

『江戸物語』

細田 隆 善△豊明▽著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

- 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録
- 定価一八〇〇円【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

△発行・発売▽  
ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一  
電話(〇三)二六九―一二九三 二六七―六六三七  
振替(東京)七―一一〇九三ノ下二六二

があつて作句することが出来ますので、  
続けるうちに上達していくものです。日  
常散歩の時、旅の時、作句の材料は無数  
にありますから、いつも俳句を作るよう  
にすれば自然と上達するものです。俳句  
はだれでも、どこでも作れるものです。

瘦せ蛙まけるな一茶これにあり 一茶  
作句は五七五の定型に季語を入れる二  
つのことを大切にして、自由に数多く  
作ってみて下さい。旅行も一層楽しくな  
り、日々の生活を俳句にすれば、人生が  
豊かになります。

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十七巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもつて、弊会の維持会員として月刊「浄土」刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰會

## 陶 禅 三 昧

いし ばし こう ろ  
石 橋 紅 呂

生きるものの息の根を止めるほどに厳しかった今年の猛暑も漸くおさまる頃、丹波の山ふところに開ける町、綾部の駅に降り立った。長い間あこがれのひとつとして抱きつづけてきたある禅僧との出会い、それがいま叶えられようとしている。国道27号線を車で走り、黒谷和紙の里へ行きつく途中に、妙徳寺と刻まれた小さな石柱が立っている。

執拗につづく残暑にぐったりと衰えた夏草が両側に続き、山門への道が舗装でないのが嬉しい。土の感触を靴底で確かめつつ、小さなときめきが胸をはしる。来意を告げると思わぬ方から鼠色の作務衣を着た村田陶石師が出て来られた。お顔の皺が笑顔のためにつくられたような、満面に充ちるにこやかさに思わず私は手を合わせて突然の来訪を詫びた。

どうぞと招いて頂くのに甘えて木の面のまだ新しいお茶室に上らせて頂く。陶石師ご自身がその略歴に「臨済宗妙心寺派妙徳寺閑栖」と書かれているように、この静かな里の佗び住まいが、師に作陶への執念と座禅三昧の日々を過されるのにふさわしいものであらうと思われる。床の間を拝見すると陶石師お作の洪い丹波焼の壺に、芒のはしり穂と野の花が活けられ、違い棚には師の丹精になる古丹波焼の水指、菓子器等々が並べられている。なかでも日展入選作のどっしりとした胴の厚みにも言われぬ窪みの妙味、洪い茶褐色の釉葉が障子の明りに光っているのは圧巻である。

もう何年前になるだろうか、NHK教育TV「こころの時代」で「土と炎の禅」を聴い

たのは――。おずおずとそのことを師に聞きただすと、突然師は「ナア、カアチャンあれ何年前になるかいな」と、お水屋でお茶をたてていて下さる奥様をふりかえって言われた。その童顔の横顔にはと救われて途端に茶室が明るくなった。師のへだてのない人間の温かさがじかに伝わってきた。奥様は「そうですね――」と言って茶筌の手をゆるめながらメガネの奥の眼を細められた。

裏庭に出て窯を見せて頂く。古文書にある通り丹波の土で筑かれた窯は、巨大な青虫が土色に変色してのぼっていくような恰好である。七日七夜寝ずの番をなさる時、陶石師の童顔はどんなに厳しく輝くのだろうか――。

ここが「こころの時代」に出ました時の記念に建てた陶房です、と言って案内して下

さったのは陶石師の作陶の場であった。裏木戸を開かれると山峡の稲田を吹く風がさっと入ってきて土の匂いがした。神戸、東京、福岡等で個展を三十数回重ねられた折の写真集を見せて下さり、又師が主宰される墨心会の書も拝見した。目を上げると陶房の鴨居には「陶禅三昧」の見事な墨跡の扁額が掲げられていた。清々しい感動を抑えつつ素焼きの作業場を通して頂く。白く乾いた壺を十ばかり並べて、奥様がうわぐすりをかけておられた。屈みこんで黙々と作業をされる奥様の背に、長い年月陶石師と共に尽くして来られた方の強さが沁んでいるようであった。

山門を下る私たちを陶石師は笑顔で見送って下さった。丹波の空はくまなく晴れて、高い雑木林を渡る風はもう秋であった。

◇◇平成四年用新版◇◇

## 浄土宝暦

B6判 総ページ数 40ページ

一部単価 70円 (200ブ以上 特価65円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

＜お申込み＞

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会

(振替) 東京3-82187

季語やぶにらみ(夫)

晩夏の花二題、烏瓜・竹煮草

木きの下した隆りゅう一いち  
(隨筆家)

烏瓜花ととのへて月も戌いヌ

窪田鬼烽火

五年ほど前、私が所属する俳誌「春皇」の巻頭を飾ったこの句に、私は次のような鑑賞文を送った。

「烏瓜は夕闇が深まるころ、五裂した花卉

の縁から、何百本もの極細の白い糸を噴き出して一斉に開き、未明にはそれを内側に巻き込んでしぼんでしまう、はかない一夜花であるが、月光を享けて楚々と咲く様は、幽玄としか言いようがない。それだけに人目に触れ

ることは少ないが、一度目にすれば、記憶から消し去ることが出来なくなる花である。戊イヌは今風に言えば西北西の方角であり、戊イヌの刻は午後八時前後に当たる。野暮な詮索をすれば、時間的に考えて、この月は上弦の月であろう。戊と去ぬの掛け言葉の妙は、まさにペテランの味。」

ペテランの味と書いたが、三十年ぶりに復帰した、帰リ新参の私は、鬼烽火という人とは面識がなく、詳しい経歴などは何一つ知らない。しかし、誌上での鬼烽火さんの遇し方や、「烏瓜エビガラスズメ如法暗夜の花にも蛾」「烏瓜咲けば蝦エビ殻天蛾ラスズメの夜」といった句が持つ、えも言われぬ味わいからみて、そう判断したのである。この句にはもう一人批評を寄せた人があった。書き手は「春星」ではペテランの一人。

古い同人で、少なくとも七十歳代半ば、いやそれ以上の年輩の方かと思うが。

「烏がついばむ実ではなく、花をとりあげられたことに敬服。夏の夜三寸ほどのレース飾りのついた、白っぽい美しい花をひっそりとつける。余り目立たないだけに、これだけの観察力、表現力には脱帽する次第。」

と、実に簡潔な文章であった。私とは視点が異なるので、内容については言及しないが、俳句の批評というのはこういう風に書くのかと、そのお手本を示されたような気がした。私のは無駄な言葉が多すぎるのである。

それはさておき、少し「烏瓜」なるものを検索してみたい。

烏瓜（カラスウリ）Ⅱ本州以南の各地、沖縄、台湾、中国に分布するウリ科の蔓性の多

年草で、山麓や人家近くの藪などに生える。

茎は細く、節から巻きひげを伸ばして他物に絡み、高くよじのぼる。七、八月ごろ、白い筒状花を開く。花卉の先は深く五つに分かれ、更に細かく糸状に裂けて伸び、それが互いに絡み合っている様は、精巧なレース編みかと思ふばかりである。雌雄異株で、花は夜開き朝には閉じる。晩秋、大きな赤色の実が熟す。果肉からはあれどめの化粧水を作り、黒褐色のカマキリの頭に似た種子（漢方という土瓜仁）は、祛痰、鎮咳、鎮痛剤として用い、塊状に肥厚した根（土瓜根）からは、黄疸、利尿、催乳、通経、排膿などに効く薬剤を製す。」——（典拠「日本国語大辞典」他）

我々が烏瓜の存在に気づくのは、花ではなく、やはり晩秋、木の枝などにぶらさがって

揺れている赤い実を見つけた時であろう。都心でも時々思いがけないところで出合つて驚くことがあるが、あの赤い色には或る種の郷愁と寂寥感と覚えさせるものがあつて、私は好きだ。江戸時代中期を代表する俳人の一人大島蓼太も同じ思いであつたか、「紅井もかくては淋し烏瓜」なる句を遺している。

烏瓜の花を私が知つたのはずっと後年で、伊豆暮らしを始めた翌年の夏のことであつた。夜遅く伊豆高原の駅に降りたもののタクシーが拾えず、仕方なく月の光を頼りに歩き出したのが出合う結果に繋がつた。偶然であつた。もし、あの時タクシーがあつたら、また、もし、あの時月が出ていなくて歩いて帰る気を起こさなかつたら、私と烏瓜の花との出合いはなかつたのである。

烏瓜は無人の別荘を巡る生け垣に、点々と白い花を咲かせていた。いや、まだその時は烏瓜の花とは知らず、そのあまりの美しさに私は呆然と立ち尽くして、造花の妙とはこのことかと思つた。

（もしかすると、これは烏瓜の花かもしれないぞ）——ふとひらめくと、私は手近な一輪を摘んで帰り、早速「最新俳句歳時記」に当たってみた。そして確信を得た。それには、「晩夏のころ、五つに裂けた白い花を開くが、雌雄異株で、雄花の縁が網状に細かく裂けて周囲に総ふさのように垂れさがったさまは、繊細な感じである」と記されており、

烏瓜蕾を上げて垣越ゆる

山口青邨

吹き並び花びらもつれ烏瓜

星野立子

ほのほのと泡かと咲けり烏瓜

松本たかし

などの句が例句として挙げられていた。その他、一夜花であることを教えてくれたのは「季寄せ―草木花」の「夕方開花し、翌朝陽があたるころにはしぼんでしまふが、早起きの人なら見ることができよう」という記述であつた。

翌朝白々明けのころ、私は下駄をつっかけて見に行つたが、花はすでに悉く花弁を内に巻き込んで閉じてしまつていた。あのレース編みの糸のような細い花弁を、どうやって一糸も余さず巻き込んでしまえるのか不思議でならず、その後何度か時刻を早めて見に行つたが、遂にその決定的瞬間に立ち合うことはなかつた。見てはならぬという、造化の神の思し召しだったのであらう。

烏瓜の花の他に、私が伊豆に来て覚えたも

のの一つにタケニグサの花がある。名前は知らなかったが、都心でも荒蕪地などではよく見かける草で、他の草を圧して伸びる猛々しい姿と特異な形状から、厚かましい帰化植物としか見ていなかったが、自分の家の庭に生えてくると話は別である。抜いても抜いても次々に芽を出し、一週間も留守にすると、ぐんぐん伸びて収拾がつかなくなってしまうのである。そのくせ草自体は案外脆く、力を入れて引き抜くとスポッと根元で切れて、黄色い、見るからに毒々しい汁を出すから始末が悪い。

「まるで、ゲリラみたいなやつだな」

と女房に言うのと、

「これ、サンディエゴの、バルボワ・パークの、ほら、動物園に降りて行く道の両側に植

えられていませんか？」

と、意外なことを言った。

「そうだったかな」

「絶対にあれよ」

断定的に言われても、記憶にないから答えようがない。日ごろあまり植物に興味を示すことのない人の言うことだから、にわかには信じ難かったが、そう言われてみれば、洋式庭園に似つかわしい草と言えなくもないなという気がしてきた。要するに、かなりバ・タ・ク・さい草なのである。

タケニグサという名前を知ったのも偶然だった。パラパラと辞典をめくっているうちに見付けたのだから、あまり自慢は出来ない。だけにぐさ（竹似草）＝ケシ科の多年草。

高さ二メートルに達する。山地に普通で、し

ばしば鉄道線路などの荒れ地に群生する。茎は中空。白粉を帯び、折れば黄赤色の乳液を出す。葉は大きく深い切れ込みがある。夏、白色の小花をつける。有毒植物。茎、葉の煮汁を塗布剤とし、害虫駆除に使用。占城（チャンパ）菊。

と、「広辞苑」には出ていた。

手元にある辞典や歳時記を総動員して検索すると、辞典類の見出しは「竹似草」になっているのに対して、歳時記では申し合わせたように、「竹煮草」になっているのが興味を引いた。「季寄せ―草木花」よれば、

竹煮草 北海道以外の日本全国のお路傍、原野などに野生するケシ科の大形多年草。茎が緑で中空なので竹似草であるとか、茎や葉から出る黄色い汁を入れて竹を煮ると柔らかく

なるというので、竹煮草だとか言われているが、竹が柔らかくなるとは信じられないので、竹似草が本当であろう。六、八月、大きな円錐花序にたくさんのお花をつけるが、お花弁は見えず、一本の雌しべと多数の雄しべがあり、二箇の萼片は開花すると落ちてしまう。果実は莢が風に揺れてさやさや鳴るので、ササヤキグサの名がある……。

また、「最新俳句歳時記」には、

山野に生える目立つ草である。（中略）ちゃんば菊ともいうが、占城（チャンパン）から渡来したと誤想したのに基づく名で、元来日本のお野草である。

と、いろいろ新事実が明らかになった。歳時記類が、信じ難いとしながらも「竹煮草」に固執しているのは、この語に俳諧味を感じ

ているからであらう。

「竹煮草って言うらしいぞ。竹と一緒に煮ると竹が柔らかくなるんだって。歳時記には信じられないと書いてあったが……」

「でしょうね。もしそうだとすれば、竹細工師が使ってるはずよ。でも、そんな話聞いたことないわね」

「一度試してみるか。駄目で元々だものな」  
「お好きなように」

女房の反応は極めて冷やかであった。鍋を貸せとでも言おうものなら、逆鱗に触れるのは火を見るより明らかなので、話題を変えた。  
「日本固有の野草だというのが、本当かなあ『チャンパ菊』、てのが引かかるんだ」

「チャンパって地名ですか？」

「十七世紀末まで、今のホー・チミン市辺り

にあった国で、中継貿易で栄えていたらしい。とすると、八幡船や御朱印船も行ったはずだから、種子を持ち帰ったと考えてもおかしくないだろう」

「ご研究なさってください」

女房の返事はあくまでも冷やかだった。

爾来十余年、竹を柔らかくする実験もしなければ、伝播の経路も審かにしていないのだから、女房に先見の明があったということになる。ただ、年々矮化（劣性遺伝か？）してゆく姿を見ているうちに、竹煮草の花が可愛く見えるようになって来た。多分荒れた庭に竹煮草が同化して、邪魔にならなくなったせいだろう。

竹煮草にいささか強き風当たり

隆一

（この項おわり）

## ◎ 読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。が、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六、十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

### 「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円  
(送料不要)

浄土 五十七巻 十月号

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

平成三年九月二十五日 印刷  
平成三年十月一日 発行

編集人 宮林昭彦  
発行人 佐藤密雄  
印刷所 南小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三三六)二五九四四  
〒103(振替)東京八―八二―八七

◇◇◇好評の新刊◇◇◇

暮らしに  
生かす

# 仏教成語辞典

寺内大吉・栗田順一編 価二二〇〇円

◎仏教の心と豊かな智慧のエッセンス！

仏教語が日常雑語として多くの人に使われているが、その仏教語を理解して、またその語意を把握して使っている人がどれほどいるだろうか。本書は馴じみ深い仏教成語一二九の原意、仏教の真髄をわかりやすく説いた仏教入門書。

△出版・発行▽

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三―七 電話(〇三)三三三三―三七四一

\*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話(〇三)三四三六―三三五一まで。

第五十七卷

十月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行  
平成三年九月二十五日印刷  
平成三年十月一日発行